

『スタンダード工学系のベクトル解析』第1刷～第8刷正誤表

この度は、標記書籍をお買い求めいただき誠にありがとうございました。
標記書籍に誤りがありました。訂正し、深くお詫び申し上げます。

【正誤対象】

書籍の一番後ろの頁（広告など除く）に奥付がございます。
ご参照いただき、お持ちの書籍の刷数をお調べください。

2014年11月17日	第1刷発行	この日付のみのものは第1刷です。
2016年8月19日	第2刷発行	
2018年7月17日	第3刷発行	
2019年7月4日	第4刷発行	
2020年7月31日	第5刷発行	第1刷の日付以外に日付が入っているものは、
2021年2月19日	第6刷発行	表示されている刷の書籍です。
2021年8月16日	第7刷発行	
2023年1月17日	第8刷発行	
2024年1月23日	第9刷発行	

お持ちの書籍の刷数とご参考いただく訂正箇所の関係は以下となります。

お持ちの書籍の刷数	ご参考いただく訂正箇所
1刷	第1, 2, 4, 6, 8刷の訂正箇所
2刷	第2, 4, 6, 8刷の訂正箇所
3刷	第4, 6, 8刷の訂正箇所
4刷	第4, 6, 8刷の訂正箇所
5刷	第6, 8刷の訂正箇所
6刷	第6, 8刷の訂正箇所
7刷	第8刷の訂正箇所
8刷	第8刷の訂正箇所
9刷	なし（現在修正箇所は見つかっておりません）

[第8刷の訂正箇所]

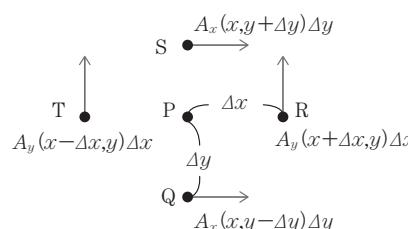
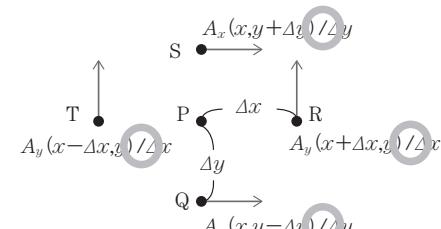
ページ	位置	誤	正
13	4～11行目	したがって、ベクトル \vec{OA} と \vec{OX} がなす角 α は、直角 三角形の辺の長さと三角比の関係から $\cos \alpha = \frac{ \vec{OX} }{ \vec{OA} }$ ベクトル \vec{OA} , \vec{OX} の大きさを考えれば、 $\cos \alpha = \frac{ \alpha_x }{ \alpha }$ となる。なお、なす角 α は $0 \leq \alpha \leq \pi$ と考えても問題 はない。このとき $\cos \alpha$ は負の値もとので、 α_x も負 の値をとることができる。したがって、絶対値記号 を外して $\cos \alpha = \frac{ \alpha_x }{\alpha}$ と表記することが適當である。	したがって、ベクトル \vec{OA} と x 軸がなす角 α は、 $0 \leq \alpha \leq \frac{\pi}{2}$ のとき、直角三角形の辺の長さと三角比の関係 から $\cos \alpha = \frac{ \vec{OX} }{ \vec{OA} }$ ベクトル \vec{OA} , \vec{OX} の大きさを考えれば、 $\cos \alpha = \frac{\alpha_x}{ \alpha }$ となる。なお、なす角 α は $-\pi < \alpha \leq \pi$ と考えても問 題はない。このとき $\cos \alpha$ は負の値もとので、 α_x も 負の値をとることができる。したがって、 $-\pi < \alpha \leq$ π に対して一般に $\cos \alpha = \frac{ \alpha_x }{\alpha}$ と表記することが適當である。

ページ	位置	誤	正
33	3~4行目	つまり、勾配ベクトルは法線ベクトルに方向が一致している。したがって、大きさが1の単位法線ベクトルを \mathbf{n} とすると、 \mathbf{n} は次のように表される。 $\mathbf{n} = \frac{\nabla\varphi}{ \nabla\varphi }$	つまり、勾配ベクトルは法線ベクトルに平行である。したがって、大きさが1の単位法線ベクトルを \mathbf{n} とし、勾配ベクトルと同じ向きに \mathbf{n} をとると、 \mathbf{n} は次のように表される。 $\mathbf{n} = \frac{\nabla\varphi}{ \nabla\varphi }$
	15~16行目	増加することを意味する。	増加する。
101	問題8.4(1) 2行目	$\dots + (2x^3yz^2 + 3xy^2z + x^2y^2)\mathbf{j}$	$\dots + (2x^3yz^2 + 3xy^2z + x^2z^2)\mathbf{j}$

[第6刷の訂正箇所]

ページ	位置	誤	正
67	問題10.1 2行目	変数 t により $\mathbf{p} = t\mathbf{i} + t\mathbf{j} + t\mathbf{k}$ ($0 \leq t \leq 1$) で表される。	変数 t により $\mathbf{p} = t\mathbf{i} + t\mathbf{j} + 2t\mathbf{k}$ ($0 \leq t \leq 1$) で表される。
72	問題11.2 1~2行目	曲線 C が点A (1, 2, 3) から点B (3, 4, 1) に至る曲線とするとき。	曲線 C を点A (1, 2, 3) から点B (3, 4, 1) に至る直線とするとき。

[第4刷の訂正箇所]

ページ	位置	誤	正
36	3行目	なお、ベクトルの勾配に関して、	なお、スカラー場の勾配に関して、
44	7.2節2行目	点Pに与える	点Pに對して持っている
	7.2節4行目	ここで点Pに与える影響とは、点Pを回転させる方向に働くものとし、その回転させる大きさは、点Pから Δy 離れた点Q、Sからは x 軸に平行な成分 A_x が影響をもち、その大きさは A_x の大きさと点Pからの距離 Δy の積 $A_x(x, y - \Delta y)\Delta y$ 、 $A_x(x, y + \Delta y)\Delta y$ により決まるとする。また、点R、Tからは、 y 軸に平行な成分 A_y が影響をもち、大きさは $A_y(x + \Delta x, y)\Delta x$ 、 $A_y(x - \Delta x, y)\Delta x$ により決まるとする。これらが点Pを回転させる方向に働く影響であり、	ここで点Pに對して持っている影響とは、点Pを回転させる方向の量として表され、その大きさは、点Pから Δy 離れた点Q、Sからは x 軸に平行な成分 A_x が影響をもち、その大きさは A_x の大きさと点Pからの距離 Δy の商 $A_x(x, y - \Delta y)/\Delta y$ 、 $A_x(x, y + \Delta y)/\Delta y$ により決まるとする。また、点R、Tからは、 y 軸に平行な成分 A_y が影響をもち、大きさは $A_y(x + \Delta x, y)/\Delta x$ 、 $A_y(x - \Delta x, y)/\Delta x$ により決まるとする。これらが点Pを回転させる方向の影響であり、
	図7.1		
	図7.1 タイトル	点Pに周囲が与える回転の影響	点Q、R、S、Tが点Pに對して持っている回転の影響
45	1行目、2行目	$A_x(x, y - \Delta y)\Delta y - A_x(x, y + \Delta y)\Delta y + A_y(x + \Delta x, y)\Delta x - A_y(x - \Delta x, y)\Delta x$	$A_x(x, y - \Delta y)/\Delta y - A_x(x, y + \Delta y)/\Delta y + A_y(x + \Delta x, y)/\Delta x - A_y(x - \Delta x, y)/\Delta x$
	3行目、4行目	$\frac{+ \{A_y(x, y) - A_y(x - \Delta x, y)\}}{\Delta x} (\Delta x)^2$ $\frac{+ \{A_x(x, y) - A_x(x, y - \Delta y)\}}{\Delta y} (\Delta y)^2$	$\frac{+ \{A_y(x, y) - A_y(x - \Delta x, y)\}}{\Delta x}$ $\frac{+ \{A_x(x, y) - A_x(x, y - \Delta y)\}}{\Delta y}$
	9行目	$2 \frac{\partial A_y}{\partial x} - (\Delta x)^2 - 2 \frac{\partial A_x}{\partial y} - (\Delta y)^2$	$2 \frac{\partial A_y}{\partial x} - 2 \frac{\partial A_x}{\partial y}$
	10行目 ~13行目	となることがわかる。 さらに、点Pから点Q、R、S、Tまでの距離が同じと考えると $\Delta x = \Delta y$ であり、点Q、R、S、Tの作る菱形の面積 $2(\Delta x)^2$ で上記を割った	となることがわかり、上記を2で割った

ページ	位置	誤	正
52	6行目	(e) の等号については、ベクトル三重積の関係式を用いて求められる。	(e) の等号については、たとえば成分表示により左辺を演算して、 x 成分を抜き出して変形すると、
	7行目に挿入	$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} \right) - \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{\partial A_x}{\partial z} - \frac{\partial A_z}{\partial x} \right) &= \frac{\partial^2 A_y}{\partial x \partial y} + \frac{\partial^2 A_z}{\partial x \partial z} - \frac{\partial^2 A_x}{\partial y^2} - \frac{\partial^2 A_x}{\partial z^2} \\ &= \frac{\partial^2 A_x}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 A_y}{\partial x \partial y} + \frac{\partial^2 A_z}{\partial x \partial z} - \frac{\partial^2 A_x}{\partial x^2} - \frac{\partial^2 A_x}{\partial y^2} - \frac{\partial^2 A_x}{\partial z^2} \\ &= \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\partial A_x}{\partial x} + \frac{\partial A_y}{\partial y} + \frac{\partial A_z}{\partial z} \right) - \left(\frac{\partial^2 A_x}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 A_x}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 A_x}{\partial z^2} \right) \end{aligned}$	となり、これは右辺の演算に一致する。 y 成分、 z 成分も同様になることから、等号の成立を確認できる。
54	13行目 ～14行目	分 $(\nabla \cdot \mathbf{A} = 0)$ で表され、これはスカラーポテンシャル φ とベクトルポテンシャル \mathbf{B} の和として、	分 $(\nabla \cdot \mathbf{A} = 0)$ で表され、これはスカラーポテンシャル φ の勾配とベクトルポテンシャル \mathbf{B} の回転との和として、
74	図12.1		
	図12.1下 3行目	媒介変数 v を固定すると、媒介変数 u の変化	媒介変数 u を固定すると、媒介変数 v の変化

[第2刷の訂正箇所]

ページ	位置	誤	正
7	例題1.3(1)の2行目	$\mathbf{a} + 2\left(\frac{1}{2}\mathbf{b} - \mathbf{c}\right)$	$\mathbf{a} + 2\left(\frac{1}{2}\mathbf{b} + \mathbf{c}\right)$
8	答(1)の右の図	$\mathbf{a} + 2\left(\frac{1}{2}\mathbf{b} - \mathbf{c}\right)$	$\mathbf{a} + 2\left(\frac{1}{2}\mathbf{b} + \mathbf{c}\right)$

[第1刷の訂正箇所]

ページ	位置	誤	正
4	1.3節の2行目	ベクトル \mathbf{a} の大きさは絶対値の記号を用いて $ \mathbf{a} $ で表す。	ベクトル \mathbf{a} 、 \vec{AB} の大きさは絶対値の記号を用いて $ \mathbf{a} $ 、 $ \vec{AB} $ で表す。
	最終行	これを零ベクトル(ゼロベクトル)といい $\mathbf{0}$ で表す。	これを零ベクトル(ゼロベクトル)といい $\mathbf{0}$ で表す。この零ベクトルは方向をもたない。
6	本文2行目	負の値との和と考えればよい。	負の値との和を考えればよい。
9	下から3行目	座標情報を用いて、	座標情報を用いた
22	4.1節の5行目	成分を用いて	成分を要素にもつ行列式を用いて
47	例題7.3答(2)の式 2行目	$= (\nabla(x^2 + y^2 + z^2)) \times \mathbf{A}$	$= (\nabla(x^2 + y^2 + z^2)) \times \mathbf{A} + \mathbf{0}$
48	問題7.3(3)	$\nabla \times (\log r \mathbf{C})$	$\nabla \times \{(\log r) \mathbf{C}\}$
60	9.3節の6行目	線分を ds とすると、	線分の極限を ds とすると、
	上記に続く式	$s = \int ds$	$s = \sum \Delta s = \int ds$

ページ	位置	誤	正
92	問題 14.1(4)最終行	$\int_S \frac{\mathbf{p}}{ \mathbf{p} ^3} \cdot d\mathbf{S} = 4\pi$	$\int_S \frac{\mathbf{p}}{ \mathbf{p} ^3} \cdot \mathbf{n} dS = 4\pi$
102	問題 14.1(4)最終行	$\int_S \frac{\mathbf{p}}{ \mathbf{p} ^3} \cdot d\mathbf{S} = 4\pi.$	$\int_S \frac{\mathbf{p}}{ \mathbf{p} ^3} \cdot \mathbf{n} dS = 4\pi.$
	問題 15.1(2)最終行	$\oint_C \nabla \varphi \cdot d\mathbf{p} = 0.$	$\oint_C (\nabla \mathbf{p}) \cdot d\mathbf{p} = 0.$